
ハヤテのごとく & BLEACH>灼眼のシャナ

悪靈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは、「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテの「」とく&BLEACH&・灼眼のシャナ

【著者名】

Z3385F

【作者略名】

憑靈

【あらすじ】

ある日の三千院家、ソウル・ソサエティ、虚園、空座町、御崎市、
紅世の世界。これらの世界が一つの世界に集まるとき新たな世界が
動き出す・・・。

プロローグ

それはナギが買ってきたゲームから始まった。

「ハヤテー！ ちょっと来てくれー」

「なんですかお嬢さま？」

「おお、来たかハヤテ！」の2つのゲームと一緒にやりたいんだが…。
・

「ええ、今は仕事もないですしいですよ……って
それBLEACHと灼眼のシャナのゲームのよつですが見たことありませんが新作ですか？」

この上の2人は

綾崎ハヤテ、三千院ナギ両姉である。

まあ、ちゅくちゅくキャラをだすのでその時ずつ紹介していくみたい

と思います。

「うん、 あなたこれは特別に作りさせたものだから私が持っているの
ディスク1枚しかないんだぞ！」

「それはす」「いですねえ・・・ではまずどちらからやりますか？」

「うむ、 BLEACHの方を先にやりたいから早速やるが

と言つてディスクを入れてスタートボタンを押した。

ちなみにどちらともアリのゲームディスクである。

しかし、つけてからしばらくするとテレビが突然光り部屋が見えなくなってしまった。

プロローグ（後書き）

さて今回は
ハヤテの「ごとく」、BLEACH、灼眼のシャナ
ごくたまに涼宮ハルヒの憂鬱などを交えて
作っていきたいと思います

一章・第1話・集まる魂

それは一瞬の出来事だった。突然光に包まれた空間。

その光をさえぎるかのように白い・・・いや黒いといった方がいいかもしない。

とにかく黒いけむりが前方をおおい完全に視界が奪われてしまった。

ハヤテとナギはそのけむりが晴れるのを待つてみることにした。

しばらくするとけむりが少しづつ晴れてきた。

ハヤテはほっと胸をなでおろした。

なにしろナギは暗いところが嫌いなのでハヤテの腕をしっかりとしがみついて

離れなかつたのだ。しかし、安心したのもつかの間、

胸をなでおろした瞬間、眼前び数人の見知らぬ人物の影が見えた。

すると再びナギがハヤテの腕にしがみついた。

しばらくむつの向ひをじりていたハヤテだったが

けむりが晴れその正体が明らかになると、ハヤテとナギは驚いた。

それはなんと「AIME BEEACH」で有名な黒崎一護・井上織姫・石田雨竜・茶渡泰虎が

目の前にいたからだ。一瞬のことだったのでナギとハヤテは硬直していた。

向ひも突然のことだったのだらつ・・・。

いきなり口などに出たりしゃべるととした表情でじりりを見ていた。

しばらくの状態が続いたが一護が

「お前、誰だ？」

と聞いてきた。するとハヤテが

「僕は綾崎ハヤテ。」(あやまち)院ナギお嬢さまです。」

と云つと一護は

「やつか

と答えた。ハヤテはすぐに

「あなた方は、黒崎一護さん、井上織姫さん、石田雨竜さん、茶渡泰虎さんですよね？」

と云つた。すると茶渡が

「なんで君は俺達の名前を知つているんだ？」

と聞いてきたので最初ハヤテは返答に困つたがBLEACHの本とゲームを見せて

「あなた方は、ひらの側では、こうこうつ本やゲームで結構知られてるんですよ。」

と答えた。すると一護ら4人は驚いた。

なぜならハヤテは自分たちの世界とあなた方の世界は違うと表現したのだ。

「うーんですか？」

と井上が聞いてみた。するとハヤテが

「うーんは東京都練馬区65%を占める二千院家ですよ」

とつあえず練馬区の65%ということにして、石田が

「では、うーんの近くに空座町はありますか？」

と聞いてみたが、ハヤテは返答に困っていた。するとナギが

「失礼ですが空座町という地名は存在しません。先ほども説明した
ようにあなたの方の世界と
私達の世界はまったく別のものなんです」

と答えた。その後すぐにナギが質問してみた。

「ところであなた方は何をしていようとこりに来られたんですか
？」

すると一護が

「破面と戦つてこるときにこりに来たんだ。」

一護たちの話によれば強大な力を持つ破面（たぶん十刃級）4体に
全員襲われ戦闘中に

こりにいたのだという。その話を聞いたハヤテは思った。

このゲームをつなげた直後に一護たちが現れたということは

ゲームによつてこりのテレビが世界と世界の通り口になつたとすれば

そこを通じて破面たちも入って来る所はあらうか。ハヤテは

すぐトーレビのほうを見たがなんともすでに入ってきたではないか。

それに一護たちも気づいたのか戦闘態勢に入った。

一護は完全に出手する前に斬りつとしが、ハヤテに止められた。

一護は

「なんで止める?」

とたずねてきた。ハヤテは

「あなた方がこんなとこで戦闘したらお屋敷が壊れてしまいまよ

ーーー」

「じゃあどうするんだい?」

と石田が聞いてきた。するとハヤテは

「お嬢さま、そういうえばこの前牧村さんに作らせた空間湾曲装置をこの部屋につけましたね。」

「いいで少し説明しよう。空間湾曲装置はある一定の世界に別の空間への扉をつくる」と

まったくその世界とは別の次元の世界を作ることが出来る装置なのである。

ちなみに簡易空間湾曲装置といつ取り外しが可能で持ち運びができる

装置も開発されている。失礼しました。

「ああ、そこにあるがそれがどうした?」

「ではみなさんここに逃げまよ。」

とハヤテが言って扉を開けハヤテら6人が中へ入ると、

破面たちもハヤテたちにひこってきた。しばらく走るとハヤテが

「一護さん、石田さん、茶渡さん、井上さん。ここまで来ればいいですよ。

戦闘は任せするんで派手に戦つてください。」

言った。すると4人が戦闘態勢に入り破面の方へ向かっていった。

一章・第1話・集まる魂（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第2話

「くわ、こいつ強い……！」

4体中3体はなんとか倒した。

だが一護が戦っていた破面は他の三体とは比べ物にならなかつた。

破面は一護の斬月をうまくかわしながら

「なーんだ、みんなやられたんだ……。つまんないな～」

と言つた。一護は一歩退いて、破面に向かつてたずねた。

「てめえ、だれだ？」

「僕はNO・11テレンバカン。新たに加わつた破面だよ。」

「てめえの目的はなんだ？」

「目的?ないよ。
ただの調査さ。
でも君達が邪魔するから出来てな
かつたけどね」

「ふざけんな！！！冗解！！！」

一護がそう叫ぶと同時に破面に飛びかかった。

「ふうんそれが君の正解か。じゃ僕も本気で行こうかな？」

と云つと、一旦退いて長い長身の刀を抜くと

「吹き飛ばせスウィング！！」

だ。 というと突然光を発し刀が2本になつた。 それもかなり巨大な大刀

デレンバカンは一護はに飛びかかった。斬魄刀と斬魄刀がぶつかり合い

にぶい金属音はするが2人のスピードが速すぎて見えない。

その場にいた他の人たちと同じことを考えただろう。

確かに一護は理解してるのでこのスピードは分かるが

デレンバカンは2本の斬魄刀を持っている。しかも大刀だ。重量はハンパじゃないはず。

しかし、その斬魄刀を持つていながらこのスピード。はたしてデレンバカンは

NO・11なのか？2本の斬魄刀を持ってこのスピードと戦闘力は十刃であつても

おかしくないレベルなのだ。デレンバカンは

「あ～あ、これじゃ決着つかないなあ。そういえば月牙天衝つていう斬撃技あつたよね。

あれ出したよ。」「

と言つてきた。一護は

「そんなんに見たきやみせてやるよーー。」

と言つて一旦後ろに引いて態勢を整えて

「月牙天衝！！」

と言つて斬撃をはなつた。だがテレンバカンはかるく振り払つた。

「なあーんだ、その程度かあ。じゃ僕の斬撃を見せてあげるよ。」「

と言つと2本の斬魄刀を一気に振り下ろした。

次の瞬間、一護の肩に大きな傷がついた。いきなりのことの一護は
なにが

起こったかわからなかつた。

「な・・・んだと・・・なんだよ・・・これ」

その場で膝をついた。デレンバカンは

「何が起きたか分からぬって顔してるね。教えてあげるよ。

僕の斬撃は2本の斬魄刀を振り下ろした時の衝撃波。君のよつた靈圧を飛ばす斬撃じゃないぶん威力は弱いけど衝撃波だからスピードも速いし、

なにより当たる瞬間まで相手には何も見えない。」

と言った。さらにデレンバカンは

「まったく・・・。こんな戦いはやく終わらじたひやおいつよ。

だいたい調査が終わつてないし・・・。」

「ああ、確かに次で終わる。お前の負けでな。」

「何言つてゐるんだい？負けるのは君だよ」

一護は『テレンバカン』の話をスルーして

「あ～あ、本物は」んなとこで使つつもりはなかつたんだけどな。

『氣をつけろよ。この状態だと手加減はできねえからよ。』

と言つて仮面をつけた。すると同時に一護は『テレンバカン』の背後に移動し

斬ろうとする。それをなんとか防ぐ『テレンバカン』だったがガードで手一杯だった。

一護は『』の零距離から月牙天衝をはなつた。

『テレンバカン』はその攻撃に耐えられず吹き飛ばされてしまった。

くくく、またかあんな零距離で斬撃をはなつなんて・・・

いや・・・それ以上に報告は受けていたがなんだあの斬撃の威力は・・・

わざとまるで違つ・・・。へれぼじまどとは・・・。>

そんなことを考えながら態勢を整えるが一護の姿がない。

周りを見渡し一護の姿を確認しようとすると頭上から一護がせまっていた。

なんとかギリギリでかわすことが出来たが、一護の姿はまた見えなかつた。

再び一護の姿を探してみると

今度は背後から一護が現れ月牙天衝をはなつた。

しかし、今度はデレンバカンはすでに気づき防ぐとするが

一護はそのままさりに月牙天衝を重ねた。

さすがにこの巨大な斬撃を2つ重ねた攻撃を直接くらつたらまずい。

そう思つてよけようとするテレンバカンだったが

一護はわざにもう一つ月牙天衝を重ねた。

重なつた斬撃はいままでによけようとしていたテレンバカンに

もう1回スピードを増して向かつていった。

『テレンバカンはその斬撃に直撃し吹き飛んだ・・・かに見えた。

だがテレンバカンは怪我こそしていたが戦闘不能といつほどではなかつた。

その姿を見たハヤテは

「なるほど。」

と言つた。これに対しても石田は

「なにがなるほどなんだい？」

と聞いた。するとハヤテは

「僕見たんですよ。あの破面の人は斬撃が直撃する寸前に自分の虚閃をぶつけて

「衝撃を軽くしてましたんですよ。ですよね？」

と云ひと

「ああ、そのとおりだよ。たぶん虚閃をぶつけてなきゃこんな怪我じやすまされなかつた

だろうね。でもどうしようかなあ。そのまま君と戦つてもなんかやられそうだし、

やつぱつこには弱い奴を狙つよ。」

と言つと瞬時にナギの背後に移動し、ナギに斬魄刀を向けた。

「お嬢さまーー！」

「てめえー卑怯だぞー！」

一護はテレンバカンに向かつて叫んだ。

「卑怯・・・？人聞きの悪いこと言わないでよ。これも作戦の一つだよ。」

さあ、この子を解放して欲しかつたら虚化を解け！－！」

そいつ言われた一護は地上に降りてきて、虚化を解いた。

「じゃあ、この子を返してあげるよ。」

と並んでレンバカンはナギを解放した。ハヤテは

解放されたナギを迎えて行こうとした。ナギもハヤテの名前をいいながら

ハヤテの元へと駆け寄ってくる。だが次の瞬間、ハヤテの眼前でレンバカン

はナギに斬撃をはなつた。斬撃を喰らつたナギは吐血し駆け寄ったハヤテ

の胸の中に倒れこんだ。すぐに井上が駆け寄り双天帰盾で治癒する。

その姿をハヤテは呆然と立ち尽くして見つめていた。

一方、一護はレンバカンに

「てめえ、自分が何したか分かつてんのか！？」

と言つた。するとレンバカンは

「嫌だなあ。そんな怖い眼で見ないでよ。つーかさ自分で何したかつて？」

そんなのわかってるよ。嘘をついて人を斬った。」

それを聞いた一護はさらに「アレンバカンをにらみつけた。

「おお～、怖い。そんな怖い顔しないでよ。事実を言つたままでじやないか。」

その言葉に一護は我慢しきれなくなつた。斬魄刀を構え今にも飛び掛ろうとしている。

しかし、一護はハヤテにそれを止められた。

「てめえ、なにしやがる。離せーー！」

しかし、ハヤテは離さうとしない。ハヤテが離さうとしないので

無理矢理振り切ろうとするがまったく離れない。一護はハヤテの顔をふと見上げた。

すると、なんとハヤテは泣いていたのだ。

「お前・・・・」

するとハヤテは

「一護さん、すみませんがこの勝負僕に任せてくれませんか？」

「ムチャだ！斬魄刀も持つていないお前が勝てるはずない！！」

「大丈夫ですよ。『テレンバカンさん、あなたは絶対に許しません』

「ほう、君が僕の相手をすると・・・？斬魄刀さえ持つてない君がかい？」

「この奴の言ひとおりだよ。僕には勝てない。」

『テレンバカンはそいつで、笑っていた。するとハヤテは

「心配は無用です。斬魄刀ならちゃんと持つてますから。

破壊しゆせ『バロム』

と同時にハヤテの姿が消えた。

「どうだ？ どうへ消えた。」

デレンバカンは必死に姿を探す。

「うーん。」

声の聞こえた方向を向くと異様なまでに巨大な斬魄刀をもつたハヤテがいた。

「なんだその斬魄刀は・・・？」

「これはバロムと言つ僕の第1の斬魄刀だ。」

そういうと今まで黒装束をまとめていなかつたのにまとつた。その間からは

さらに別の2本の斬魄刀が見えていた。

「2本の斬魄刀だと・・・!？」

「そう僕は2本の斬魄刀を持っているんだ。じゃ速攻で決めさせて
もらおうかな。」

「ふざけるなあ・・・」

とハヤテの言葉を否定すると斬撃をはなつた。

しかし、ハヤテはその斬撃を斬魄刀で防ぐと瞬時に背後に移動。

あつといつ間にデレンバカンを斬つた。

「ぐわ・・・・・、まさかこんなところで負けてしまつとは・・・・・」

と直つとデレンバカンは消滅してしまつた。

「い・・・一撃かよ・・・」

一護はそんなことを言いながら、ひらへと戻つてくるハヤテを見て
いた。

第2話（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第3話

「テレンバカンを倒してこちらに戻つてくるハヤテに対し一護は

「お前・・・・死神だつたのか・・・・斬魄刀2本持つてるしちかも・・・強いな」

と言つた。するとハヤテは少し照れながら

「いやあ、なんでかは知らないんですけど斬魄刀持つてたんですね

強いつて言われても照れますよ。それにもう一つの斬魄刀は柄しかありませんからね」

と言つて一護に笑いながら2本の斬魄刀の柄を見せていた。

一護はそれを見ながら

「こつさつとは全然違う。あんな靈圧見たことなかつた・・・

「こつは一体なんなんだ?」

と考えてると井上が

「黒崎くん、ハヤテくん、ナギちゃんの治癒終わったよー。」

(注) ハヤテの「」とを苗字で呼ぶと綾崎・黒崎で混ざるので以前で呼ぶよかったです。

「あ、井上ちゃん…ありがとうございます」

ハヤテは井上にお礼を言つとナギの元へと近づいていった。

「お嬢さまー。」

ナギは眠っていたがじょりくすると眼を開ました

「…………ハヤテ。私は一体…………？」

ナギはハヤテを見ながら行つた。ハヤテは

「お嬢さまー。」

そつぱんとナギを抱きしめた。

「うふー…お前……なにやつてるんだー…恥ずかしいではないかー…」

「…・良かつた」

「え?ハヤテ?」

「無事でよかつた……。お嬢さまが死んだら僕は……僕は」

「ハヤテ……ありがと」

そう言つたナギだつたが一護たち（特に一護）が

ひいていたのでハヤテから離れた。

一方その頃テレンバカンは虚圈に戻つてきていた。

「くっ、まさかこんなに怪我を負いつとは……予想外だ。

くそつ……なんなんだあいは……とにかく藍染様に報告しなければ……」

「その必要はない」

後ろから誰かの声が聞こえた。それはウルキオラだった。

「ウルキオラ様。必要ないとはどういう意味ですか？」

「その報告は俺がする。お前は俺の後ろに立つ。とにかく今は傷を治せ。

今回の作戦は絶対失敗するわけにはいかない。

そのために今は1人でも戦力が必要なんだ。」

「残りの3人は？」

「残りの3人はすでに戻ってきて傷の治療をしている。

とにかく行くぞ」

「はい、ウルキオラ様」

と言つと2人は歩いていった。

この話の続きは次話で行います。

場面は戻つて元の部屋へと戻つている途中だった。

「さてじゃあ僕たちはまたこっちに破面とか虚とかが来ていたら困りますので

先に行つてますね。」

と言つとナギを抱えたハヤテはあつという間に瞬歩で行つてしまつた。

ハヤテは部屋へと戻つてきた。一応また入つてこられても困るので

ゲームの電源を消した。するとマリアが部屋に入ってきた

「ナギ、ハヤテくわびつしました？先ほど部屋に来たときまではまだでしたが・・・」

ハヤテはマリアに事情を全て話した。しかし、それに対してマリアは

「へえ～、もうですか

まったく信じこなかった・・・・。

「いやこわいこと信じてないでですよー。」

「まあわざとこわいこと隠してると
「棒読みじゃないですかー？」

そんなことを言いかけてると

「何騒いでんだ？」

一護たちが戻ってきた。するとマリアは

「あら？本当だったんですね

「だから、こつたじやないか本当だつて

「で？その人誰だよ？」

「！」人はマリアさんとこつてナギお嬢さまの専属メイドです

「せ・・・専属メイド・・・? そんな人までいるんですか?」

石田が聞いてきた。ハヤテはうんとうなずきナギに

「お嬢さま、BLEACHのゲームで一護さんたちが現れたという
ことは

こちらのゲームもそうなのでは?」

と直つと灼眼のシャナのゲームを手に取った。

「あ、そういうえばそうだな。つけてみるか・・・」

「そのゲームがどうかしたんですか?」

井上が聞いてきた。

「実は井上さんたちの時もそuddたんですが

このゲームをやつとした瞬間に出てきたんですよ。

だからこちらのゲームをやればもしかすると

このゲームのキャラがでるかと思いまして・・・・・

と直つとゲームをセットし電源をつけてみた。

するとたわわぱぱと同様けむりに包まれた。

第3話（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第4話

けむりが晴れると田の前に現れたのは一人の男だった。

一護は斬魄刀を抜いて構えたがハヤテに止められた。

「坂井悠一さんですね？」

「え？ なんで僕の名前を……？」

ハヤテはさつき一護たちに教えたようにゲームや本で
悠一の世界と「いつの世界が違うのを伝えた。

悠一はそれをじっと黙つて聞いていた。

「あまり驚いていませんね」

「まあ、『いつの』のは慣れてるからね」

ハヤテと悠一が喋っているとテレビの中から

シャナが入ってきた。悠一は振り向きシャナに近寄ると

「悠一……、『いつの』なんなの？」

「あ、シャナ……、実は……」

悠一は先ほど自分がハヤテに説明されたように

シャナにも自分達との世界がまったく別のものであることを説明した。

「じゃあ、これは現世みたいなものなの？」

「まあ、多少違いますが、多少はあります。

簡単に言えば「これは貴方たちとの並行世界みたいなものです。」

「やつなんですか……。ではなぜ僕たちはここ……？」

「実はこのゲームなんですがどうやら世界と世界をつなげるゲートみたいなものだ

考えておつまます。」

「はい。黒崎一護・石田雨竜・茶渡泰虎・井上

織姫はそれ

「で、どうだつた？ウルキオラ」

ウルキオラは自分の眼球を取り碎いた。

「分かりました。藍染様。」

じやあ成果をみせてくれるかな……？」

「お帰り、ウルキオラ・デレンバカン。

一方その頃、虚圈では……

ぞれ

実力が上がっているようです。特に黒崎一護に関してはかなりの実力が

ついてるようです。この実力ならもはや十刃でなければ止められないかもしません。」

「そうか。じゃあアレンバカン。君は何かないかい？」

「はい。今回の戦闘で黒崎一護の実力、そして戦術自体にバリエーションが増えた気がしました。ですがそれよりあの綾崎ハヤテと言つ男。

あの男の実力は計り知れません。スピード、パワー、それを生かす頭脳、

戦術のバリエーション、そして靈圧。すべてにおいて

今まで見てきた死神とは別次元の強さです。さらに言えば始解状態でのあの靈圧は

十刃級に匹敵しています。」

「そうか。報告いじ苦労。ではまたあとで集まつてもうつから。一曰戻つていいよ」

「藍染さん。面白い話をしていたな。」

「ん？ 杭菜と鎌か・・・。『ひしめたのかな？』

「なんでもないですよ。『これから『ひしめく』するのか気になるなとか思つただけだよ』

「ふふ、それはあとで分かるから楽しみにしてこぬといこう」

「の」「人はなんなのか・・・・・・

そして藍染が仕掛けている罠とはなんなのか・・・・・・

第4話（後書き）

小説読んでくれてありがとうございます

ここので皆さんにお知らせです。

オリジナルの死神・破面の名前、

またそのキャラの斬魄刀の名前

解放の名前（死神の場合は始解。

凡解がある場合はその名前も書いてください）

などのことを募集しています。

またここをこいつしたりいいのではなくどの要望も

募集しています。

作者にメッセージを送るか評価の最後に書いてください

ご協力お願いします

第5話

「では、一護やんたちは戻つていいください。

あとでやあらに向かこますので」

とハヤテが言つと向ひの世界への入り口を開いた。

「えじや、行くか！」

一護を先頭に向ひの世界へ入つていった。

「さて、僕たちも行きましょう。お嬢さまとマリアさんは

野々原さん、氷室さん、ヒナギクさん、伊澄さんを呼んでおいでください」

別の世界に入り口を開きながら伝えた。

「ではシャナさん、悠一さん行きましょつか」

3人も世界へと入つていった。それを見ていたナギとマリアも

「私達も急ぐぞ！」

急いで部屋から出て行った。

「どうあえずどうします？」

御崎市に到着したハヤテたちは話し合いをしていた。

「どうすると言つても協力を頼むのは2人しかいないし……」

「じゃあ、先にヴィルヘルミナさんのところへ行きましょう。案内よろしくお願ひします」

と語りと向かおうとするが

「これは何事でありますか

「ヴィルヘルミナ、なんでここに……」

「なんであつてあんた達いなくなつて戻つてきたと思ったたら

もう一人変なのがいたから慌ててきたのよ。そこにいるのは誰?」

後ろからマージョリーが現れた。

それから2人に今起きている事態について説明し、協力を願つた。

「分かつたのであります。今現在の状況は?」

「今僕の世界で先頭に長けた人を集めています。またもう一つの世界にも事態の説明が

されてゐると思います」

それを聞いた2人はさらに

「分かりました。では、行きましょう」

ハヤテたちは世界の入り口へと入つていった。

一方その頃、虚圈では・・・

「みんな、よく集まつてくれたね。ギン、例の物を出してくれ」

後ろにいたギンは「はい」と答えるとモニターを映像を出した。

「これは強力な実力を持つ者達だよ。一致団結して我々を倒そうとしているんだ。」

今から選んだ君たちに大虚を率いて現世へ向かってほしい

十刃のメンバーは静かに聞いていたが

「藍染様、この前見たものも含め知らないものが数人混じつてます
が・・・」

「それなら他数人は分からないがさつき見た綾崎 ハヤテと一緒に
居る者のことなら

今回協力してくれている人がいるから聞いてみるといい。じゃあ

ノイトラ、ゾマル、ザエルアポロ、アーロニー。君たちに決めた
から

行つてくるといい

一方その頃、ナギとマリアはすでに集まっていた4人に

今の状況を説明していた。

「それは大変なことになつてゐみたいだね」

「同じ執事仲間としてハヤテ君に協力してあげよ」

今協力を承諾したのはハヤテと同じ執事の野々原楓と
ののはらかえで

沢木氷室の2人だ。
さわきひむろ

「私も協力するわ」

「そうですね、すでにこの状況ではいずれこの世界にも影響が及ぶでしょうから

協力するほかないですね」

今話したのが桂雛菊かつらじこなぎくと鷺さきのみやいすみノ宮伊澄である。

とそこまで言つたところでハヤテ達が戻つてきた。

「あ、皆さん！ただ今戻りました」

「ハヤテ君話は聞いたわ。早く向こうに人と合流しましょう」

と2つの世界の強力なものたちが集まり始めていた。ハヤテは

「皆さんは先に向こうへ向かってください。僕はちょっとやる」と

がありますので

ハヤテの言葉につなずくと世界を開いて入って行った。

それを見届けたハヤテは携帯を取り出して、だれかに電話をかけていた。

「といつことなんでお願いします」

と状況を説明し協力を願うと電話口から

「わかった。今から向かう。お前は先に行つてね」

と言われハヤテははいと答えつい先ほど世界へと入つて行つた。

一護たちはといつと元の世界に戻つてきていた。

その時、

「あ、お前たち一・二に立ったのだ」

後ろからルキア、恋次、日番谷、乱菊、一角、弓親が後ろからひつちに近づいてきた。

一護たちはルキアたちに今起こうっている状況について説明した。

「なるほど、そんなことがあつたのか。そいつらはどうした？」

日番谷はたずねた。雨竜が

「別の世界とも一つ別の世界から援軍を呼びに行くと言つてしまつた。

そろそろ合流してこむらに向かっているところかと」

と言つた瞬間、ナギたちが現れた。その後ハヤテも数分後に合流し

「とりあえずソウルソサエティに協力を要請しよう」

と日番谷が言つた。だがその瞬間

すさまじい靈圧が周りに響いた。

第5話（後書き）

「JRで臨時に弓を続をお知らせです。

オリジナルの死神・破面の名前、

またそのキャラの斬魄刀の名前

解放の名前（死神の場合は始解。

卍解がある場合はその名前も書いてください）

などのことを募集しています。

また「」を「」したり「」のではなくなどの要望も

募集しています。

作者にメッセージを送るか評価の最後に書いてください

ご協力お願いします。

ただ今のところ特に破面の方を特に募集していますので

よろしくお願ひします。

第2章・第6話・破面襲来！！

巨大な靈圧が集まつたハヤテ達を襲う。

後ろを向くと4体の破面が立つてゐる。

その1体がこっちに向かつてきた。

一護が斬月を手に取り刃を受け止める。刹那鈍い音が周りに響く。

「死神代行黒崎一護だ！」

「クイント十刃ノイトラ・ジルガだ」
エスペーダ

「十刃か！なら手加減はいらねえな！」

一護は後ろに下がつて間合いをとり

「卍解！！天鎖斬月！！」

「ほひ、そいつがてめえの正解か、いい靈圧だな。

これで俺も全力で闘えるつてもんだ！！」

と言つと鎌状の形の斬魄刀を上に掲げ

「祈れ、サンタテレサ！－！」

と言つた。霧がノイトラを覆い尽くす。

霧が晴れてくると真の姿があらわになる。

頭に三田円のような角が腕が装甲で覆われており6本に増え

そのすべてに鎌持つた姿に変わった。

一方上で見ていた3人の破面は

「あらり、ノイトラのやつもう解放しちゃったねえ

いちばん右端の男が言った。すると

「私たちもさつと片付けるぞ」

真ん中の男が答える。刹那破面の後ろに凛とした声が響く。

「霜天に坐せ氷輪丸！」

端の2人は左右によけ真ん中の男は斬魄刀で防ぐ。

「十番隊隊長日番谷冬獅郎だ」

「セブティマ刃ゾマリ・ルルーです。

隊長ならば手加減はいりますまい」

といい後ろに下がると

「鎮まれ呪眼僧伽」
ブルヘルニア

白いスースに包まれ50以上の目が出現した。

残つた2人は上に現れ

「さて、僕たちも闘うとするか」

と言つと虚ホロウと

メノスグランデ
大虚の大群が現れた。

「な・・！？なんて数だ！」

石田がそれを見ながら叫ぶ。後ろからハヤテが

「仕方ありませんね。野々原さん行きましょう。破面はそちらに任せます」

と言つと大群の方に目を向けると

「破道の三十一『赤火砲』！？」

「セーフティシャッター
超爆裂炎冥斬！！」

ハヤテは鬼道を、野々原は竹刀から火の龍を繰り出す。

それに当たった虚と大虚はあつといつ間に倒れていく。

「なんなのあいつら？明らかに今隊長格クラスの靈圧放つてたじやない」

乱菊が驚きながらいづ。

「ふつ、やつぱりあの2人はすげいなあ」

「私たちも負けてられないわ」

氷室とヒナギクも飛び出す。

「正宗……」

ヒナギクは木刀・正宗を呼び次々と虚を倒していく。

氷室はバラの花を使って倒していく。

「すげえなあいつら」

一角が鬼灯丸を肩にかけて眺めている。

「私たちもやるわよ」

そのシャナの言葉に悠仁、ヴィルヘルミナ、マージョリーがつなづく。

虚へと向かっていく。破面2人は

「な・・・大虚と虚の大群を一斉に倒しているだと・・・?」

「なあ、あんたらいつまでそうしてる気だ?」

2人が後ろ向くと一角が立っている。

「あいつらが大虚と虚を倒してくれてんだ。闘う相手がいねえんだ

よ。相手してくれ

「ふつ、なら僕が相手しよ」

右の男が抜刀し、解放する。

「啜^{すす}れフォルニカラス」

斬魄刀を口から飲む込むと首から下を触手に覆われドレスを着たような

姿に変わり、背中には4本の細長い羽根が生えている。

「延びろ鬼灯丸！！」

鬼灯丸を構え

「更木隊第3席斑目一角だ！！」

「オクター・バ・十刃・ザ・エル・ア・ポロ・グランツだよ」

お互いの名前を名乗り闘いを始める。

一方もう1人の男も恋次とルキアと対峙していた。

「呑える蛇尾丸!!!」

破面はそれによけて仮面を取る。

「ふう、やつぱつこのふくはきついな・・・・・」

ルキアの顔が驚きの表情に変わる。

それは明らかに志波海燕本人であった。

To be Continued . . .

第2章・第6話・破面襲来！！（後書き）

作者『このパートナーは今回からキャラに任せることにしました。司会はハヤテ君と一緒に護衛にやつてもらいます。どうぞ』
ハヤテ「さて今日から第2章と並行してですが
破面襲来編とこいつと一緒にしますよ」

一護「これもだいたい5話程度やるつもりでござ」
ハ「次回お楽しみに」

作『ひょっと次回はひょんとやつてよね

第7話（前書き）

今回の話は特定多数のキャラしか出ていません

第7話

「どうして貴方が海燕殿……」

そう叫ぶルキアが見つめる先には自分が尊敬していた海燕が立っている。

「どうした朽木？久しづりに逢ったってのにどう叫ぶなよ」

そう言いながら笑つてこっちに近づいてくる。

虚を倒していたハヤテがまずい、と言い破面とルキアの方へ向かっていく。

ルキアは自分の頭を抱えもがきはじめた。

この懐かしい感じは間違いない海燕本人だ。

だが海燕は自分が殺した。生きているわけがない。

では前にいるのは誰だ？

しばらくもがいていたルキアだったがすっと体を持ち上げると

「お前は海燕殿ではない！！」

と言つと抜刀し斬魄刀を解放する。

「舞え、袖白雪」

純白な斬魄刀を持ったルキアは

「初めの舞、月白！！」

それを後ろに避けた男にルキアが襲いかかるうとするも

恋次がルキアを抑える。

「放せ！恋次！あいつは私が倒す！！」

「うるせえよ！あいつは十刃だ！お前一人で闘つて勝てる相手じゃ

ねえ！！

「ここは2人で倒すんだ！冷静になれルキア！－！」

破面の男を見上げながらルキアを抑える恋次。

ルキアもそれを見ながら破面を見上げた。

ふうと1つ息を吐き

「悪かつたな、恋次。行くぞ」

ルキアの声に反応しあつ、と返事をすると

「吼えろ、蛇尾丸！－」

蛇尾丸で攻撃するが簡単に避けられてしまう。

恋次は2回目の攻撃を仕掛ける。それも簡単に避けられたが

後ろに下がった方向にはルキアが待っていた。

「次の舞、白漣」

それもさっと避けられてしまつ。

「そいつは効かないな。どれも知ってる技だ。

俺が修行に付き合つてやつたんだ。俺の目の前で編み出した技だ

そんなの通用するはずないだろ『朽木』

「へり・・・・・！」

とその刹那、ハヤテの声が響いた。

「破道の三十一『赤火砲』！」

破面がとつそに後ろへ下がる。

ぽかんとしている2人の横にハヤテが並ぶ。

「なんであいつ、あんなに焦つて後ろに下がった・・・」

「僕が教えてあげましょつか。向いの世界ではこの世界は漫画になっていますので」

2人はハヤテに弱点を聞いた。それを聞いていた恋次がハヤテに聞く。

「それじゃあいつの弱点は光か・・・！」

「はい、そうです」

「だがなにか方法はあるのか・・・？」

ルキアがもつともな質問をする。ハヤテははい、うなずくと

2人に方法を伝えた。

それをみていた破面は

「今更にそんなことをしてんだ？俺を倒すのは無理だぞ」

「それはどうですかね~?」

「どういう意味だ！！」

「縛道の六十一『六杖光牢』」

破面の体を六つの帯状の光が胴を囲むように突き刺さる。

動けない破面に3人が近付いていく。ハヤテは

「破道の三十一『赤火砲』」

と言つ。威力を調整し照明にすると、

海燕の顔がなくなり、透明なカプセルにボール大の頭が2つ浮いて
いる姿が現れた。

「ちつ、はがれちまつたか……。じゃあしじょうがないね改めて挨拶をしておくよ」

2つの頭が交互にしゃべっている

「僕らはヌベーノ十刃、アーロニーロ・アルルエリだ」

ルキアと恋次は無言でアーロニーロをみつめる。

ルキアが何もだ、貴様はと問う。

「何度も言わせるな。俺達がヌベーノ十刃アーロニーロ・アルルエリ。

顔のことなら黙ってなよ。僕らこの顔の感想なら当の昔に聞き飽きた

3人はそれを無言で見つめ続けている。

アーロニーロは下を見ると

「六杖光牢か、現隊長の中では朽木白哉が得意とする鬼道だ」

「そんなことまで……」

「言つておくがお前ら3人で勝てると思つなよ」

六杖光牢を抜けて後ろへ下がる。

「ふん、俺の弱点を知つてるやつがいるんだったな。

だが僕らの能力は影さえあれば何度でも使える。

つまりこの夜の状態が続いている限り何度でもなあ

再び海燕の顔に戻る。

「俺の能力は知つてゐるんだろ？本来これはメタスタシアの靈体融合能力。

死して伏せこの虚圈に戻ってきたやつを俺が喰らつて手に入れた！」

「喰らつてだと……！？」

アーローー口はおもむろに手袋をはずし

「これが俺の能力、グロトネリア喰靈。

死した虚を喰らつてその能力と靈圧を我が物とする力だ」

と言いつつ触手らしきものが手袋の下から姿を現れた。

思わずルキアの顔がしかめる。

「こいつは志波海燕の体で帰ってきたやつをその体」と喰つて手に入れた力だ」

それを聞いたルキアは

「そ・・・それでは・・・・・」

「そうだーお前が感じた懷かしさは勘違いではない。

この体志波海燕のもの。体にはすべての経験が脳にはすべての記憶がそのまま残っているーーー

つまりこんなこともできる」

「水天逆巻け捩花」

固まる2人に対してハヤテは冷静にアーロニーを見つめる。

「だがあ前らはここで終わりだ。最後に十刃の刀剣解放を見せてやる」

「喰い尽くせ喰靈」

下半身が巨大な蛸のような姿に変わった。

「言つておくが十刃の刀剣解放を破面の刀剣解放と同等と思つなよ。

俺の喰靈は喰らつた虚の能力をすべて同時に発言できる。

俺が今まで喰らつてきた虚は33・650体・・・

ここから先は30000を超える虚の大軍勢と3人で闘うに等しい
と思え!」

思わず固まる2人の横からハヤテが前へ出る。

「言いたいことはそれだけですか？」

「なんだと？」

「分からぬ人ですね。あなたのつまらない説明はそれだけですかと

聞いたつもりなのですぐ」

「そりが、お前は俺の能力はすべて知っていたんだったな。

ではすぐに殺してやる！」

アーロニーロはさう言いながらこちらに近づいてくる。

だが次の瞬間、ハヤテの姿が目の前に現れる。

「なつ、バカな！お前はまだあの2人の隣に……！」

「破壊し尽くせ、バロム」

「くつ・・・・・」

斬魄刀を解放したハヤテにアーロニーロはとつともに動じないとするが

「おつと逃がさないよ。縛道の六十三『鎖条鎖縛』」

太い鎖が蛇のように巻きつき体の自由を奪う。

ハヤテは後ろに数歩下がり斬魄刀を掲げると

「破壊弾『カタパルト』」

そういうと無数の玉状の斬撃がアーロニーロに直撃する。

ハヤテは斬魄刀を鞘に戻すとルキアと恋次の方へ向かう。

ハヤテが2人のところにたどり着いた瞬間、アーロニーロが爆風の中から現れる。

それを見て驚く2人に對して、ハヤテはちらっと後ろに視線をやり

「へえ、しぶといですね」

「なめるな！」

アーローは刀剣解放を解きナギ達がいる方向へ向かう。

「十九二 · · · !」

恋次がアーローを追いかけるがハヤテがそれを止めた。

「大丈夫です。あそこにはまだ伊澄さんがいますから」

「死ねええええええええ！」

ナギを狙うアーローの前に伊澄が飛び出す。

「お前が相手するのか？」一瞬で終わりにしてやる！――

そう言って捩花を振り下ろすが伊澄は指一本で抑えると

「八様六式・撃破滅却」

その刹那強力な爆発が発生しアーロニーは巻き込まれて姿を消した。

第7話（後書き）

ハ「どうでしたでしょうか？今日は僕の新しい技が出ましたね」

「…………」

ハ「えつと……、どうしました？」護さん

一「いや？別に今回は俺の出番なかつたなって

思つただけだが……」

ハ「一護さん！大丈夫ですよ。次の話では

出番があると作者も言つてましたからーー！」

一「俺は一応この小説の主人公なんだよな？」

ハ「えつと……ではまた次回～」

まことに申し訳ありませんでした。

次の話ではちゃんと登場してもらいますので…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3385f/>

ハヤテのごとく & BLEACH&灼眼のシャナ

2010年10月11日01時08分発行